台 転 日 本 語 文 学 報

25

【論 文】
黄 如 萍 谷崎の志賀からの受容——「柳湯の事件」における「濁った頭」の摂取—— 1
蔡 宜 静 北川冬彦の「長篇叙事詩」創作方法に関する初探——シナリオ形式との関連について—— 27
沈 美 雪 俳句における「台湾趣味」の形成——明治期台湾における俳句の受容と展開を通して—— 53
森安雅子「菊花の約」に描かれた「信義」についての一考察——結末部の丹治殺害をめぐって—— 79
廖 秀 威 陳火泉「道」論——語りからみる作品の（批判性）—— 105
葉 雞「僕」の語りから解く「風」の謎に隠された装置——村上春樹の初期三部作を中心に—— 127
賴 錦 真 男性描写における日本語形容詞「〜い（男）」をめぐって——「〜い（女）」との比較も兼ねて—— 149
王 世 和 論説文における予告の機能—— 171
王 淑 琴 「〜がたい」の意味の特殊化について——「〜がたい」と中国語の「難以〜」との対応も含めて—— 195
王 寧 東 日治時期の台湾におけるエリート——生理学専門の日本人を中心に—— 219
劉 晓 君 公学校における国語科の教科内容決定の要因——台湾第四期公学校用国語教科書を中心に—— 243

【教育研究報告】
黄 淑 妙 山本望司「台湾人日本語学習者コーパス」(CTLJ)試行版の公開—— 269

【活動彙報】
2009年1月～6月例会要旨—— 293

2009年6月
台 転 日 本 語 文 学 会
台灣日治時期的精英
—以生理學專長的日本人為中心—
王敏東
銘傳大學應用日語學系教授

摘要

研究各時代重要的人物除有助於了解當時的社會狀態、特徵及時代意義等外，亦可闡明各時代的歷史定位。

本文描述活躍於台灣與日本連接最緊密之日治時期（1895～1945）各醫學專業領域的領導人物。以當時台北帝國大學醫學院各專科負責人為對象，尋求當時的資料、記錄以描繪出他們對台灣之間的關連，並與文獻研究成果相比對。

本文具體描述生理學專長領導人物，並與文獻中曾被論及的耳鼻咽喉科、婦產科，及解剖學等三個專長領域的日本精英比較討論。結果了解學經歷、當時國際情勢、及專長等因素對這些領導人物的影響，也得知這些精英份子因應當時時代變遷的反應及表現。

關鍵字：醫學 台北帝國大學 傳承
Elites in Taiwan during Japan-Colonized Period:
Japanese with Physiology Specialty

Wang, Ming-Tung
Professor, Ming Chuan University, Taiwan

Abstract

Studying elites in each period assists not only understanding its social status, characteristics and era value, but also illustrating its historical position.

This study described the active leaders in each medicine discipline of medical schools during Japan-colonized period (1895-1945). The link between Taiwan and the directors of clinic departments at Taihoku Imperial University were looked for. Comparisons with literature study were herein made.

In particular, this work profiled the leaders in physiology and compared the characteristics of these Japanese elites with those in otolaryngology, gynecology and anatomy. The results demonstrate how the academic background and experience, international circumstance, and expertise on these elites, and how these elites responded to these mentioned environment.

Keywords: Medicine, Taihoku Imperial University, Inheritance
日治時期の台湾におけるエリート
—生理学専門の日本人を中心に—
王敏東
銘傳大学応用日本語学科教授

要旨

各時代における重要な人物について究明することは、その時代の実態・特徴・意義などを明らかにすることができるばかりでなく、その時代の歴史の流れにおける位置付けを可能とするものである。

本稿は、日本と最も密接に関連している日治時期（1895～1945）の台湾において、医学という分野で活躍していたエリートを描くものである。具体的には、当時最高学府であった台北帝国大学医学部における責任者をとりあげる。先行文献の研究成果とあわせながら、当時の資料・記録を調べ、本稿でとりあげた人物の様子——とくに台湾とのかかわりについて検討した。

具体的には医学において基礎的かつ重要な位置を占める分野の1つである生理学のリーダーたちを中心に、先行文献で探究された、臨床科である耳鼻咽喉科、産婦人科、そして基礎医学の解剖学という3つの分野で活躍していた日本人エリートとあわせて論じた。その結果、学歴・当時の国際情勢・専門分野などがこれらのリーダーたちに与えた影響、もしくはこれらのリーダーたちが時代に対してどう表現したかが分かった。

キーワード：医学 台北帝国大学 伝承
日治時期の台湾におけるエリート
－生理学専門の日本人を中心に－

王敏東
銘傳大学応用日本語学科教授

1. はじめに

各時代における重要な人物がその時代とのかかわりについて究明することは、その時代の実態・特徴・意義などを明らかにすることができるのでありで、各時代の歴史の流れにおける位置付けを可能とする。

本書は、日本と最も密接に関連している日治時期（1895～1945）の台湾において、医学という分野で活躍していたリーダーたちを描くものである。

医学は常にかかわる分野で、日治時期の台湾において日本人により最初に導入された高等教育の専門分野でもある。日本人が台湾で医学を重点的に展開したのは、日本軍が上陸した当時、戦死する人よりこれにより、チフス、マラリアなどの伝染病に感染され亡くなる人の方が多かったことに関係がある。統治者である日本人の健康を保障することに加え、公衆衛生を重んじることや医療機関の設立などによって、民心を収攬するという意図から、台湾治下の手段の一つとして選ばれたわけである。日本人によって導入された西洋医学は、

臨床の病院を発端とし、後に高等専門教育と結ばれ、さらに台北帝国大学に帰属され、今現在の台湾大学医学部にまでつながっている。この、日本人によって台湾で最初にたてられた病院は、設立当初外科と内科しかなかった。後に、外科を皮切りに産婦人科、耳鼻咽喉科など、内科から眼科、小児科などが独立した専門科として設立された。一方で、基礎医学の一環として解剖学、生理学などが初期の医学校の時代より講義されてきている。

そのような台湾における近代医学の流れにおいて、人物誌のような研究として、王（2008a）の臨床科である耳鼻咽喉科、王（2008b）における基礎医学である解剖学についての論考などがあげられる。

耳鼻咽喉科は外科から独立した最初の科である。台湾の日治時期にこの専門分野で活躍していたリーダーたちは岸一太、柏原省弘、細谷雄太、杉山栄、加納芳次、上村親一郎、山下憲治の7人である。岸はその個人の倶進に、日本から日本内地に戻った後、医学から策鷹したが、台湾滞在中の現地調査の結果を含め、数多くの研究発表を残し、台湾の医学界に大きく貢献した。他の6人もいずれも研究成を示し、台湾の医学の発展に力を挙げた。とくに最後の上

日本軍が台北橋に入ったり、閣をおかずに設立された大日本台湾病院が最初である。1898年に台湾総督府台北に改称された。

医学教育は1899年に台湾總督府医学校で開始された。それは医学校創立者である山口秀高が、幕末での経験に基づき、現地の人を対象に医学教育を施さば現地の医学に直接利用できると主張したことにより始められた。この学校は、1919年に台湾總督府医学専門学校、1922年にさらに台湾總督府台北医学専門学校と改称された。また、台北帝国大学は1928年に設立されたが、医学部の開設は1936年である。翌年にには台湾總督府台北医学専門学校の校地を使用するようになり、1938年に帝大自身の附属病院が成立するという過程を迎えた。一方、医事の方は1936年に台北帝国大学附設医学専門部と改称した。

1945年の日本敗戦により、接収した国民党政権により台湾大学と改名された。

各科の成立や流れについては台大医学院百年院史編輯小組編輯（1999）、台湾大学医学院附属医院（1995）などが詳しい。

飛行機に興味を感じ、財産を飛行機関連の研究などに多く使い込んでいた。晩年に宗教に熱心で、精神障者がとまで判定された。
村と山下は台湾人弟子によりエピソードなどを生き生きと伝えられている。また、細谷雄太は文学才能の持ち主でもある。

台北病院及び台北帝国大学医学部産婦人科のリーダーには石添正道、迎設、真柄正直の３人がいた。この３人は、個々人の生涯はさまざまなであるが、台湾の近代産婦人科の創立・発展に大きく貢献した。彼らの活躍した時期は、ちょうど、石添正道は草創期、迎設は臨床の隆盛期、真柄正直は学術研究重視期、と区切ることができるもの3つの時期ともその時代の背景を反映し、まさに医学そのものの発展軌跡を重ねている。つまり、正しい医学（産婦人科）概念がないところ（19世紀末・20世紀初の台湾）に正確な医学（産婦人科）の知識の導入、伝承、そして制度の建立という草創期から出発した。石添がこの時期の功労者にあたる。住民の医学（産婦人科）への理解が確立したことにより自然と患者が増えていき、彼らに対処する上で臨床上の優れた技術を持つ迎は大きな柱となった（臨床の隆盛期）。その後、臨床の現場を支える研究が必要となってくると、真柄が学術を重要視する態度、及び基礎研究を重視する態度を築いた（学術研究重視期）。ただし、個人の仕途としては、研究にほどほど積極的でないと思われた迎は希望する帝大産婦人科の責任者となれず、暗然と台湾を去った。代わりに来た帝大初の産婦人科教室の責任者である真柄はその研究能力が注目され、元来専門であった細菌学から臨床の産婦人科へと専門を変えての来台であった。ちなみに、真柄は在台中、桃園大浜が大気面に入り、水墨画の雅号を大浜とするほどであった。

同じ基礎医学の一環として解剖学があるが、解剖学が生体の構造を研究する学問であるのに対し、生理学はさほど具象的なものではなく、生体の機能（生物と体の動き）を研究する学問である。両者は対置されるが、本来、不可分の関係にある10。

7 詳細は前掲王（2008 a）を参照。
8 終戦直後、台北帝国大学医学部は一時桃園に臨時開設された。
9 林（1997）など。
10 『Yahoo！百科事典 小学館 http://100.yahoo.co.jp/』。また、台湾大学医学
解剖学のリーダーには、解剖学専門の教授としては初めて台湾にやってきた津崎孝道、1936年に台北帝国大學に医学部の設置に伴い、解剖学における2講座の責任者となった森於菟と金閏丈夫、そして台北帝国大學附属医学専門部解剖学教室の安達島次があげられる。森と金閏はともに戦後まで台湾大学に勤務しており、帰国後も台湾大学と連絡をとり続けていた。現在でも台湾大学医学部解剖学暨細胞生物学研究所（Graduate Institute of Anatomy and Cell Biology）の元祖のようにされている。4人のうち、台湾滞在期間が比較的短かった津崎以外、いずれも台湾にかかわる研究を残した11。金閏丈夫と森於菟氏は、自らの専門である医学の他に、文学・文芸・文化にも関心を持ち、金閏は『民俗台湾』という現在の台湾研究に大きな価値がある資料12を創刊し、森於菟の長男である森於菟は、台湾大学医学部歴史館に銅像が建てられている13。

基本的に日治時期に来台したこれらの医学各専門分野のリーダーたちは高い学歴を持ち、欧米に留学した経験がある。また、医学以外、他に文学、民俗、絵などに興味を示した多芸多才のエリートも多かった。彼らの医学専門の研究にしても、才能を発揮した他の芸にもかも、台湾と深いかかわりが見られる。なお、前期に来た人たちより、比較的後期に来た人の方が台湾とのつながりが強いように思われる。

以上のような先進研究に対して、本稿は日治時期の台湾における生理学専門のリーダーたちについて論じたい。

部耳鼻咽喉科の許慶貴氏、長庚医院耳鼻咽喉科の蘇仁亮氏、三軍總医院一般外科の蕭德全氏、国光医院医学科学の蕭彦宇氏、藤崎裕氏による。
11 台湾の“漢人”（原住民のことを）や台湾特有の動物（たとえば台湾筆山甲など）についての研究である。
13 王（2008 b）が詳しい。
14 ほとんど博士号を持っている。
2. 医学における生理学

現在各医学学科で生理学が基礎科目として授業されていることから、この科目は医学において基礎的な知識に位置付けられていることが分かる。また、ノーベル6賞の1つにノーベル生理学・医学賞が含まれることも考えあわせると、生理学の重要性がうかがえる。

20世紀に入って以来、生理学が飛躍的に発展している。ノーベル生理学・医学賞初代の授与者は1901年のことで、日本では日本生理学会が1922年に正式に発足した。

一方、中国大陸では実験を中心とした近代生理学が1920年代より発展してきており、それに対して、台湾では1899年の台湾総督府医学校のカリキュラムに生理学が本科二年生の授業として教授されており、1936年に台北帝国大学医学部の設立に伴い、医学部に生理学教室がついて入るに至った。台湾で授業されていたのは、日本人が導入した西洋医学のものであった。

3. 台北帝国大学生理学教室の教授

生理学は医学において基礎的な分野で、外科、内科のような臨床医学でないため、台北帝国大学医学部成立以前は、前記のように台
台湾総督府医学校で教授されていたものの、病院で1つの専門科としては存在していたかった。1936年に台北帝国大学医学部の設立に伴い、生理学が1つの独立した教室となった。

台北帝国大学医学部は、正式に設立される前から東大の三田定則が実質上の責任者として内定していた23。林（1997：110）によると、三田は東大出身の優遇感を持っていたという。また、三田の弟子松本明は、三田の「開業医となっても研究を続けよ」という教示を守ったという24。また、陳・李（1995：18）、劉（1995：19）も研究を重んじてほしい、台北帝国大学医学部を日本一の医学部にしてほしいという三田の願望に触れている。そのようなことから、台北帝国医学部が初代の学部長の時より研究を重要視する姿勢は明らかである。三田は日本全国から優秀な若手医学者を網羅し台湾に来てもらった25。

本節は日治時期（1895～1945年）の台湾における生理学を専門とするリーダーたちの台湾とのかかわりを検討する。具体的には台北帝国大学生理学教室の教授を中心に取り扱う。第一講座の初代指導高（1936年4月～1937年6月）、2代目の永井（1937年8月～1939年8月）、3代目の竹中（1939年9月～1945年10月27）と、第二講座の細谷（1936年4月～終戦28）である。前述したように、生理学は中国大陸より、台湾の方に早く導入された。また、この分

23 法医学が専門。1937年に台北帝大の学長になった。
24 1934年6月1～4日の『台湾日日新報』、1934年9月29日の『読売新聞』など。
25 三田などの行動は帝大医学部が設立する前にすでに急速にしたとまえれば台北帝大附属の医学者に衝撃を与えた。衝突となったこともあった。たとえば、前述した産婦人科の並転は帝大に選ばれなかった元医師の1人だった。
26 ただし、竹中（1951）の『統計学の方法』に「1939年台北帝国大学教授に就任。1946年卒業」という著者略歴がある。
27 ただし、細谷が台湾を去ったのは、1949年8月のことである。台湾大学医学部生理学科暨研究所のホームページ。
野において、後世に重大な影響を与えたのは何といっても、生理学を専門とする機構・部門のリーダーである。論は各リーダーの台湾とのかかわりを軸に進める。

3.1. 萩島高
初代教授萩島高の就任と転任について、昭和十七年や昭和十八年の『台北帝国大学一覧』に「医学部･･･教授 昭和十一年一月十八日任官 昭和十二年八月三十日転任 医学博士医学士 萩島高」と明かに記載されている29如く、萩島が台湾に滞在した時間は非常に短かった。それが故に、氏の研究論文は『台湾医学会雑誌』に2本しか見られない30。著書には『血液』(萩島高他、1950、生理学講座刊行会)があり、台湾のいずれの図書館にも所蔵されていないようだ。日本に帰った萩島は、1941年7月13日の『台湾日日新報』に「萩島高氏 (北海道帝大医学部教授)」とあるように、北海道大学に赴任したことが分かる。

3.2. 永井潜
広島出身で、1902年に東京帝国大学を卒業し21、欧州（主にドイツ）留学してから、東大生理学教室2代目の責任者となり、生理学学会会長22、東大医学部部長（1934年12月27日～1937年3月30日）23を歴任した日本の「生理学の泰斗」24・「優生学の泰斗」25である。

29 また、1937年8月31日の『読売新聞』に「台北帝大教授兼北大教授萩島高任北海道帝大教授（二等）医学部勤務を命ず」という「文部事件（三十日）」が公開されている。
30 1936年の「短波と生物的電流の作用と非医療的適用」と「視診はWeigert法により」という『読売新聞』が見られる。
31 田中筋愛子記念医科学館のホームページ、1934年12月21日の『読売新聞』による。
32 1928年2月27日『読売新聞』に「学術の花を飾る帝都に十九会興味の中心は伝説二博士の大講座である」。
33 文建会『台湾大百科全書』、東京大学医学部（http://www.m.u-tokyo.ac.jp/information/history/deans.html）などによる。
永井憲は1937年10月より、台北帝国大学生理学教室（第一講座）の責任者であると同時に、同大学医学部の学部長（2代目）にも任命された。昭和十七年と昭和十八年の『台北帝国大学一覧』「旧職員」に「医学部・教授（学部長）昭和十二年十月九日就任昭和十四年七月三十日退官」、「医学専門部・主事昭和十二年十月九日事務取扱教務昭和十四年七月三十日退官医学博士医学士永井憲」と提示されている。実は永井が台湾に赴任する際、数年後に現三田純長の後任として第三代台北帝大総長の椅子に就任するという文脈がある。1938年1月28日の『読売新聞』に「北支新政権の下に機構を刷新して今秋九月再開校に決した国立北京大学医学部開設に選ばれた東大名誉教授、台北帝大医学部長永井憲博士」とある。

（1999：110）は、このように、医学部長の任期が2年未満であることより、学部をリードする業績が判断しにくいと指摘している。

実は永井が台湾に赴任する前の1911年8月31日から19日までの『台湾
日日新報」に「衛生上の台湾」という氏が専ら台湾を論じる記事が登載されている。同紙には、1920年9月29日と10月2日との2回に分けて「自然科学より観る男女の比較問題」の（上）と（下）、1928年1月5日「わが人口と産児制限問題」文化すじすれば出産減無産者ほど多産この皮肉を解釈するが急務産児制限は日本ではダメ」、そして1933年11月7日には「医学者十五名が～内地満鮮から来台～永井潜博士を筆頭に～台湾医学会総会に招かれて」という氏の台湾訪問に関する記事が見られる。以後、台北帝国大学医学部長として赴任したこと（1937年10月13日「永井医学部長～廿六日神戸発」）、1937年4月17日「科学の使徒として～永井潜博士北支へ～得意の生理学を講義」、1938年4月1日「講演（台北七・三○）断種法の話～台北帝国大学医学部長～医学博士永井潜」、1938年4月27日「結核と結婚」、1938年10月14日「講演（台北九・四○）台北帝国大学医学部長医学博士永井潜～北支に於ける文化工作」、1938年12月21日「永井潛博士～けふ北京へ」と、1939年6月30日「永井医学部長辞任は確定的～台大は一切絶縁」、1939年8月20日「人事～永井潜氏（国立北京大学名誉教授）」など、氏のことが数多く取り上げられている。

また、永井が台湾生活にいた期間中、「永井潜氏の「北京滞在中の所見」と題する講演がありたり」と「教授永井潜氏、学術調査の為に六月二十八日より九十日間中華民国河北省北京へ出張」の記録が『学内通報』第二百七号（1938年10月31日）と第二百二十三号（1939年7月15日）に残されている。

永井潜の、東大を定年退官してから台湾に来るまでの間の北京行きは、「最近亜に日支関係が緊迫して支那の一部では「対日開戦論」まで持ち上がっているこのとき、日支外交の“癌”を伴うアジアの科学の使徒として赴く博士は同時に「平和の使者」とも期待される・・・・はじめして日本医学の第一人者を迎える北平大学では早速鄭重な“聘

41「・・・いつ度は定期講義のために北京に出張する」との内容があった。
書”を添えて、最高の栄誉たる“名誉教授”的称号を賜って来てある」と1937年4月16日の『読売新聞』で示されている。また、1937年5月25日の『読売新聞』に「支那側の招聘に応じて生理医学特別講演のため帝大名誉教授永井博士は来平したのを機会に日支合同学士会を結成」とも報じられている。が、台北帝国大学を辞めてから改めての北京行は中国大陸（北京大学医学部）で「日本軍方為控制学校於1938年7月通過仏教育部聘请日本生理學家永井博士為名誉教授。1939年7月、永井博士が台湾帝国大学医学部受講、専任・学校名誉教授41、同時聘请了8位日本教授來校任課。」（筆者訳：日本軍は学校（北京大学）を統御するため、1938年7月に仏教育部（文部省）を通じて日本の生理学専門家である永井博士を名誉教授として招聘した。1939年7月に永井博士は台湾帝国大学医学部受講、学校（北京大学）の専任名誉教授とし、同時に日本より8名の教授に学校（北京大学）に教職を務めるように来てもらった」とされている。

永井博士は非常に多くの著書を残しており、『生命論』（1916年五版、洛陽堂）、『臨床上必要ナル神経生理及病理』（永井博士・熊谷直三郎著、1920年、公誠堂書店）、『アリストテレスよりニュートンまで』（1929年、春秋社）、『内分泌』（1929年四版、興学会出版部）、『人性論』（1931年、人文書院）、『自然観より人生観へ』（1933年五版、人文書院）、『優生学概論』（1936年、雄山閣）、『科学と道徳』（1940年、目黒書店）、『哲学より見たる医学発達史』（1950年、杏林書院）、『生命に関する十講』（1955年再版、共立出版株式会社）44、という日本語の原著と、『食物及栄養』（永井博士・顕微自訳、

41 1937年4月16日の『読売新聞』に「北平大学名誉教授の称号を賜るに OSC と写真ト中にも掲載されている。また、1942年8月14日の『読売新聞』にも彼が北京大学医学部名誉教授である身分を掲載。
42 北京大学医学部「校史回顧・教育史、堅持办学的1937－1945年」
http://www5.libu.edu.cn/htm/xs_htm
43 他に高島巖編著『社会事業大系』（1933年、中央社会事業協会）に収録されている「生物学概論」もある。
1968 台一版、台湾商務印書館）、『生命論』（永井著書・胡歩蟾訳、1970 台一版、台湾商務印書館）、『科学総論』（永井著書・黄其徳訳、1967 台一版、台湾商務印書館）、という中国語訳本が、現在台湾大学図書館に所蔵されている。

『台湾医学会雑誌』には、「体質戦テ」（1933 講演）、「日傘頭ノ遮光度戦テ」（1938 共著）、「空中浮遊媒験定量戦ノ新法戦テ」（1938 共著）、「北京滞在中ノ所見」（1938）が残されている。また、その著書は1933年の「東京帝国大学医学部」と1938年の「台湾総督府中央研究所衛生部（部長永井貞教授）」となってている。

永井の著書や『台湾日日新報』に公表された氏の論説からもうかがえるように、永井氏は哲学者、性科学、生命論、さらに優生学に関心を持っていた。関連する活動として、北欧より帰国した後の1930年に日本民族衛生学会を結成した。従来見られなかった大規模な優生学者の団体である。『その目的は、所謂「社会・文化的背景を考慮にした医学研究及び社会発展の目的とする当時としては先覚的な理念に基づいている。』「創立当時の世界情勢によって本学会が民族主義的優生学の学会と誤解されることもあったが、当時、圧倒的に優勢だった要素選元主義・人体機械論及び決定論的パラダイムから距離を保ち、包括主義・人体有機体論及び確率論的パラダイムを志向する学会であり続けて今日がある」という。

実は生理学を出発し、性科学、優生学などにつながる永井の一連の主張・理論は、早くから日本国内で話題となっていた。1925年

45 タイトルと著名のみで、「原稿未着」とある。
46 たとえば、1935年2月25日の『読売新聞』に「日本民族衛生学会は数年前東大医学部長永井貞博士を中心として全国各大学専門学校の生理、衛生学者その他の人々三千人を会員としてうまれた優生学研究の団体だ」とある。
47 たとえばかつてアメリカで起こった黒人排斥運動の理論的背景は優生学である（『Yahoo！百科事典』）。また、20世紀初ドイツ学者は種族衛生学を提出し、北欧の人種を優秀な人種とした（呉2000）。これが1933〜1945年のナチスドイツの惨劇と深くかかわっている。
『太陽』（1号）には永井渕の名前が2回見られた49。「読売新聞」では1927年より永井渕の名が頻繁に見られる。そのようなものに、たとえば結婚生活を幸福にするための研究の推進（1931年9月29日）、産児制限（1928年10月31日、1928年11月29日）、中でも特定の患者における産児制限（たとえば1930年7月6日に「精神病者と夫婦同士は医師の裁量で結婚を中止されること」、1935年2月25日に「注意喚起のための雑誌を刊行する」（1935年12月12日）、さらに「悪質」男女の断絶法律で強制される（1935年12月8日50）、1936年1月15日、1936年12月12日、1938年1月28日、1938年3月15日、1938年4月23日、1940年3月9日）という法的断絶（断絶法または優生法）に制限するかどうか持ち上げられているものがある51。

実は西洋医学における優生学の発展の中で、1880〜1940年代は半科学的な段階に位置している52。永井が代表として1930年代より日本で推進した大規模な一連の活動は当時の世界の脈動に乗ってい

49 「内分泌学説の歴史の回顧」医学博士 永井渕「人体の不思議医学博士 永井渕」である。
50 天気予報「かつてハンセン病を治した術」[「大誌報」
http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?dtype=2&ph=6656966022&c=199257]
51 「文化の中核をなす人間の頭脳を研究して低能、白痴、不良少年などの精神
破壊者を撲滅しようというわが国最初の脳研究所が精神病研究の一端として
こうす軍に建設されることになった…にかく真面目にこめ入った研究続けよ
うと思ふ寄付金は永井学部長と…三文で管理」とある。
52 「つるり真面目な結婚をして頭のいい丈夫な子供をつくりましょう」というので、
永井渕博士を中心とする日本民族衛生学会がこの集会において学会員の皆さん連
絡して調査した結果、ちょっと出来あがったのが「日本優生結婚普及会」である
なのような内容が掲載されている。この記載から、氏が通俗講演会なども積極
的に行なったことが分かる。
53 たとえば1928年10月31日『読売新聞』「産児制限は実効が出来ぬ」、（1928
年11月29日『読売新聞』「産児制限は国法上公知すべきや否や」）など。
54 崔（2000）。
ると思われる。しかし、台湾では積極的に優生学を宣伝・努力する気配があまり見られず、むしろ北京への未練が感じられる。

3.3. 竹中繁雄

竹中繁雄は1926年東大卒である。この3代目の責任者について
は、『台北帝国大学一覧 昭和十七年』に「生理学第一講座担任 医
学博士医学士 竹中繁雄 富山」という記録が残されており、また、
1937年12月4日の『台灣日日新報』で「生理学を背負って立つ者」
として取り上げられている。台北帝国大学『学内通報』第二百六
三号（1942年4月15日）の「教授竹中繁雄氏 生理に関する研究
調査並日本生理学会出席の為四月二日より十八日間東京へ出張」か
ら見れば、氏がスコのリーダーになる前にすでに台湾にいたことが
分かる。

『台灣医学雑誌』で見られる竹中の研究テーマは「蛙皮電圧二
及ボス麻酔薬ノ作用ニ就テ」（1936）、「頻数刺激ノ実験 （第一報）」
（1937）、「頻数刺激ノ研究（II）疾患曲線ニ就テ」（1938、中西雄と
共著）、「重量計上運動ニ於ケル瓦斯代謝ニ就テ」（1938、畠山靖夫
と共著）、「蛙皮ノ働作電流源ニ就テ」（1939）、「頻数刺激ノ研究（第
三報）」（1939、中西雄と共著）、「Vaileria ノ人間理論ニ現ハル
Lagrange 函数ニ就テ」（1940）、「熟溶血ノ化学転換ニ就テ」
（1943、光田照、大場一兵衛、橋本修治と共著）である。

また、現在台湾大学図書館に所蔵されている氏の著書は『理論生
理学』（1940、丸善；1940再版、丸善）、『統計学の方法』（1951、文

---

56『読売新聞』を例にすれば、1920年以前に優生学に関する記事数は2件しか
なく、1920〜1925年と1926〜1930年はそれぞれ12件、1930〜1935年には29
件、1936〜1940年には21件まで減少している。これらの記事数
から判断すると、日本では優生学的ないしは優生学的なイデオロギーが1930年代後期より政策に
反映さされることがうかがえる。ちなみに、現行母体保護法（1996年施行）が
改正される前は優生保護法（1948）、国民優生法（1940）があった（『大辞泉』、
『Yahoo！百科事典』など）。

57 竹中（1961）『統計学の方法』における著者略歴による。
光社）、の3点である57。このうち『理論生理学』は台湾滞在中のものである。他に『生理衛生学』（1967）、『脳の生理学』（1957）という著書もあり、前者は台湾師範大学図書館に所蔵されているが、後者は台湾では見当たらない68。

3.4. 細谷雄二

台北帝国大学第一講座の歴任3人の主任に対して第二講座の方は終始細谷雄二が1人で担当していた。東北大出身の細谷は戦後もしばらく台湾大学に留任していた。

細谷雄二に関する情報は、たとえば『台北帝国大学一覧 昭和十八年』に「家畜生理学・家畜生理学実習 医学博士 医学士 細谷雄二 山形」と「医学部・・・教授・・・生理学第二講座担任 医学博士 医学士 細谷雄二 山形」とある。また、台北帝国大学『学内外通報』第二百二十五号（1939年8月15日）に「教授細谷雄二氏 熱帯生理に関する研究調査の為八月九日より十三日間台南州下へ出張」、第二百四十号（1940年4月15日）に「教授細谷雄二氏 生理学教授上に関する研究調査及び理学部出席の為四月一日より十八日間千葉県の下県へ出張」、第二百七十六号（1941年10月31日）に「教授細谷雄二氏 生理学に関する研究及び理学部出席の為十月十六日より十五日間東京、京都、宮城の各府県へ出張」という氏の研究の足跡が残されている。

細谷の研究は『台湾医学会雑誌』に「視黄及視白二就テ」（1936）、「聴動物ニ於ケル生物電気的現象ニ就テ」（1937、吉田行と連名の講演要旨）、『聴覚内耳灌流液含有セラルコ感光物質ノ研究』（1937、阿久根徹と連名の講演要旨）、『視紅再生機能ノ研究』（1938、大喜多孝、

57 他に『体育衛生学』（1952）が図書館の蔵書検索では出てくるが、実際に館内には見当たらない
58 中国大陸の遼寧中央大学に所蔵されているようである（http://lib.libtcn.edu.cn/showmarc/table.asp?n1mp&zh=230734&table=wxyx）
石井豊、阿久根徹と連名の講演要旨）、「視紅ノ新抽出法」（1939）、阿久根徹と連名の講演要旨）、「人類組織ノ発光現象」（1940）、細谷
ノ新光生理学「ダイトミン A ノ意義」（1942）、「臺灣在住者ノ筋作
業時ニ於ケル瓦斯代謝ニ就テ」（1943、篠野正隆と連名）の8本が見
られる。目（視覚）における生理学や、嗅粘膜の生理学に優れた成
果を示したと分かる。

また、日治時期における台湾の言語である『台湾日日新報』に細
谷雄二に関する記事は8点ある。「台大医学部の教授を任命 本月中
旬ごろ発令」（1936年1月11日）、「督府辞令」（1936年1月19日）、
「医学部領事の改定 四月十五日入学式 杜博士昇為大学教授」（1936
年3月31日）、「堂堂・東門の一月に 医学部の新建築 赤十字医院
の開院にちよう 荻原配置国ばる完成」（1936年5月21日）、「生理
学会台北部会の例会」（1936年10月26日）、「急行中尉 橋本辰次君
を弔ふ」（1939年12月5日）のような医学にかかわるものの他に、
「近甚」（1937年10月16日）、「愛書と読書」（1940年1月18日）
のような、主の文芸にかかわる才能が披露されたものもある。
実は台北帝国大学医学部部歌の歌詞は細谷雄二の作である。

細谷雄二と同時期に台北帝国大学にいた者で、彼同様医学者であ
ると同時に、文芸などの面においても作品や業績が残した者には、
解剖学の森於菟、金総先生や、細谷雄二の実兄である細谷雄太が
あげられる。兄の雄太の方は1912年より台湾総督府医学専門学校教

58 1940年1月18日の「愛書と読書」の作者細谷雄二は「筆者は歌人台北帝国大
学医学部教授」とされている。

59 「藤原の国士しずめし 大皇子の功はたかく 剣濤の陵にかぼして 花満く
朱輝かきたり 友よおもへ 風雲の急告ぐる時 燦として国威かがやく 吾等
が栄か 貴意たかくおたる吾等たたはる苦楽をよる 若草の幽曲に浴みて
青春の健康さあり 友よおもへ 東西の学問を取り 身を養して治世をはから
む 重き任務を 造業の島在ることろ 南方へ熱帯ののび 西方へ露ひらける
おかげ天地希望に充ちたり 友よおもへ 東洋の学問を成して 列国に魁やかむ
大の誇を」という内容で、『台大医院数書』（1995：xvi）に掲載されている。

60 森於菟と金総先生については王（2008 b）が詳しい。
授兼台北医院院長（耳鼻咽喉科専門）をしていた62。兄弟そろって台湾の医学に大きな影響を与えたのである63。

日本に帰った細谷雄二は大阪市立医科大学（現在大阪市立大学の前身）に赴任し、後に学長になった64。

3.5. 生理学のリーダーたちの結び

近代医学において基礎的で重要な位置を占める生理学は、日本人によって中国大陸よりも先に台湾に導入された。それは日本、中国大陸、そして台湾の3ヶ所のいずれにとっても戦争が多く、主権が及んだ範囲が変化したりした時代であった19世紀末・20世紀前期のことであった。この時期の台北帝国大学生理学教室のリーダーたちは、近代生理学の台湾への伝来及びその伝播という大きな役割を果たした。齋島長、永井満、竹中繁雄、細谷雄二の4人の中、齋島は親しの深い存在で、永井は台湾より日本や中国大陸での影響の方が大きいと思われるが、竹中繁雄と細谷雄二は台湾に滞在した時間も長く、台湾滞在中に研究成果も数多く残した。ただし、これらの研究者たちは台湾または台湾人のみに深く関連しているものは少なかった。台湾にかかわっているものとしては細谷雄二が作詞した台北帝国大学医学部歌ぐらいであろう。

4. おわりに

全体的に見て、台北帝国大学医学部に各部門の主任教授として派遣されてきた者は学歴も経験も優れた秀才が多い。学歴重視、出身校に対する誇りはこだわり、そして研究重視の姿勢も、初代医学部長三田定則の期待に応え根を下ろした。

注
62 細谷雄太については王（2008a）が詳しい。
63 ちなみに、森昌秀（海軍軍医）と森昌蔵（解剖学専門）のように、家族に医学者がいるケースも多い。
64 医学部長（兼）医科大学長昭和28年7月～32年6月
(http://www.med.osaka-cu.ac.jp/abeno/medmas.shtml)。
また、研究のテーマについては、解剖学、耳鼻咽喉科などのリーダーたちは台湾とかかわる研究が多いのに対して、生理学のリーダーたちは所在地“台湾”に対する関心が低いようである。何故かというと、解剖学、耳鼻咽喉科などの研究対象は具象的なものが多いのに対し、生理学は生体の機能・現象という、いわば決まった形態がないものを対象とするからであろう。なお、彼らが医学専門以外の分野に興味を示した場合、底にもとの医学専門分野の知識・概念が隠れているのである。たとえば、永井における生命論、優生学、人倫論なども原点は生理学であろう。

最後に、時代との関係で見ると、初期台湾に赴任してきた者に、藩島のように台湾と深く縁を持たない者がいる。中期に来た者に、迎（産婦人科専門）のように失意した者も、永井（生理学専門）のように舞台を別の場所に移した者もいる。後期の者は、よくに台湾人を敵視していなければ大体森（解剖学専門）、金関（解剖学専門）、良栄（産婦人科専門）、竹中（生理学専門）、川谷（生理学専門）のように、敗戦後も台湾大学に留任した。まして、末代のリーダーたちは榛（解剖学専門）、金関（解剖学専門）、真柄（産婦人科専門）のようにほとんど後の台湾大学医学部と連絡を保っていた。

台湾における近代西洋医療体系の構築は、19世紀末に日本人によって着手されたものである。その後、生化学教室は、日本でも台湾でも20世紀前期に確立された。台湾の場合は、最初は主に3人の日本人主任のもとで発展してきた。本稿は、日台多くの資料に基づき、台湾の生理学に大きく影響を与えたにもかかわらず、きちんと整理されてこなかったこれらの日本人の足跡を辿っただけでなく、同時期における他の専門のリーダーたちとも比較した。

参考文献（年齢順）
読売新聞社（原版 1894〜1945；CD-ROM 1999〜2002）『読売新聞』
（原版 1895〜1925；国立国語研究所編（2005）『太陽コーパス』博文館新社）『太陽』
台北帝国大学『学内通報』（1938～1941）
台北帝国大学（1943）『台北帝国大学一覧 昭和十七年』
台北帝国大学（1944）『台北帝国大学一覧 昭和十八年』
王昭文（1981）『日治末期台湾的知识社群（1940-1945）－《文芸台湾》，《台湾文学》，《民俗台湾》三雑誌の歴史研究』清華大学歴史研究所修士論文
中国生理学会編輯小組（1986）『中国近代生理学六十年』湖南教育出版社
庄永明（1998）『台湾医療史－以台大医院為主軸』遠流出版
陳君憲（1991）『日治時期台灣医學生社會地位之研究』台灣師範大学歴史学科修士論文
小田俊郎著・渋谷錫（1995）『台湾医学50年』前衛出版社
国防医科学院院史編纂委員会（1995）『国防医科学院院史』
台湾大学医学院附設医院（1995）『台大医院百年』
台湾大学医学院附属医院（1995）『台大医院百年懐旧』
劉兆堂（1995）「我所知道的三田先生」（台湾大学医学院附属医院（1995）『台大医院百年懐旧』に収録）
陳天機・李鎮源（1995）「医学者：三田定則教授」（台湾大学医学院附属医院（1995）『台大医院百年懐旧』に収録）
曾一珊（1996）『従『民俗台湾』看1941～1945年間立石鉄臣的版画創作』師範大学美術学科修士論文
陳艸紅（1996）『日本時代的臺灣文化與日本－以『民俗台灣』為中心』東吳大学日本語学科修士論文
陳永興（1997）『台湾医療發展史』月旦出版
林吉崇（1997）『台大医学院百年院史（上）日治時期（一八九七—一九四五 年）』
顏谷庭（1999）『台湾医学教育的軌跡與走向』芸軒図書
戴文鈞（1998）『日治晚期的民俗議題與台灣民俗学——以《民俗台灣》為分析場域』中正大学歷史研究所博士論文
台大医学院百年院史編輯小組編輯（1999）『台大医院百年院史（下）』
系科所史
呉夏（2000）「（生物学）優生学」 『中国大百科全書 知恵蔵』 中国大百科全書出版社
崔志勇（2000）「（現代医学）優生学」 『中国大百科全書 知恵蔵』 中国大百科全書出版社
陳美燕（2000）『民俗台湾』 雜誌之編輯設計 『台湾科技大学設計研究所修士論文』
林嘉芸（2000）『日治体制下台湾女性文化之研究～以《民俗台湾》為探討主題～』 『文化大學日本研究所修士論文』
陳孟勳（2001 第二版）『中国生理学史』 北京医科大学出版社
小田滋（2002）『堀内・小田家三代百年的台湾—台灣の医事・衛生を軸として—』 『日本図書刊行会』
卡斯蒂廖尼著・程之主訳（2002）『医学誌』 『広西師範大学出版会』
謝博生（2004 第二版）『現代医学在台灣—台湾医学会百年見証—』
台湾大学医学部
王敏東・蘇仁亮（2006）『從「瘟疫」/「黑死病」到「鼠疫」—中日疫病名稱考源—』 『医問』 11、77-85 頁
陳穎（2006）『「民俗台湾」と日本人』 敦良出版社
王敏東（2008 a） 「台湾の医学に影響を与えた日本人—耳鼻咽喉科の場合—」 『日本医史学雑誌』 54 巻 3 号、279-280 頁
王敏東（2008 b） 「影響台湾醫學的日本人—以台北帝大解剖学専長之領導者為中心—」 『台湾史料研究』 32
王敏東（2009） 「日本とかかわる 19 世紀中期以前の台湾近代医事の変遷—台湾大学医学部と国防医学院を中心に」 『医問』 15

サイト資料（文頭（作者名・サイト名が多い）の50音順。調査期間は2008年6月〜2009年1月である）
大阪市立大学（医学部） http://www.med.osaka-cu.ac.jp/
『大辞泉』
http://dic.yahoo.co.jp/dsearch)dtype=2&p=%C5%B7%B7%BA%C9%C
日本民族衛生学会 http://jshhe.com/
日本生理学学会 http://physiology.jp/exec/page/society_history/
台湾大学 http://www.ntu.edu.tw/chinese2009/about/history.htm
台大医学部医学学科
台湾大学医学部生理学科暨研究所
東京大学医学部
http://www.m.u-tokyo.ac.jp/information/history/deans.html
田中館愛橘記念科学館
http://www.civic.ninohe iwate.jp/aikitu.html
日本民族衛生学会 http://jshhe.com/gaiyou/index.htm
福山誠之館同窓会 http://wnl.fuchu.in/~seif-dou/index.htm
文建会『台湾大百科全書』
http://tainedia.eca.gov.tw/index.php?title=%E6%B0%B8%E4%BA%95%E6%BD%9B%EF%BC%88%E6%96%87%E5%BB%BA%E6%9C%83%E7%BB%8F%BC%89
北京大学医学部「校史回眸 忍辱负重、坚持办学的1937－1945 年」
http://www95.bjmu.edu.cn/htm/x5.htm
松本明 作家解説
http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/museum/sakka/SAKKA50_KAI/%8F%BC%96%98%BEKAI01.HTML
『Yahoo！百科事典』小学館 http://100.yahoo.co.jp/
林从敏（1999 年 11 月 8 日）「世纪人物 往事如烟 遗韵悠然 张锡钧教授百年追忆」『光明日报』
http://www.gmw.cn/01gmrb/1999-11/08/GB/gm%5E18234%5E12%5E6M12-005.htm

紙箱の都合で文中に言及されている永井潜、竹中繁雄の著書は再掲しない。
謝辞：本稿における『読売新聞』の資料整理は銘傳大学応用日本語学科の林益泓氏に協力していただいた。注 10 にあげた台湾大学医学部耳鼻咽喉科の許繹鏘氏、長庚医院耳鼻咽喉科の蘇德亮氏、三軍總院一般外科の詹德全氏、国防医学院医学学科の蕭顔宇氏、鄭清娟氏とあわせて感謝の意を表す。

台湾日本語文學報25
台灣日本語文學會
2009年6月
編集委員会

召集人 邱榮金
副召集人 賴錦雀 吉田妙子 鄭婷婷
編集委員 邱若山 彭春陽 孫寅華 陳艷紅 林長河
 小林由紀 黃翠娥 蘇文郎 羅曉勤 麥雲莊
執行編輯 落合由治 林青樺
助理編集 王俞琪

論文と教育研究報告の投稿に関する外部審査の結果、全投稿21
本中12本が掲載された。今号の掲載率は57.1％である。

出版者：台灣日本語文學會
理事長：邱榮金
會址：25137台北縣淡水鎮英華路151號
淡江大學日本語文學系
傳真：(886) 02-2620-9915
網址：http://www.geocities.jp/taiwan_nichigo/

出版日：2009年6月30日
ISSN 1727-2262
JOURNAL OF JAPANESE LITERATURE & LANGUAGE IN TAIWAN 25

CONTENTS

Research Articles

Huang, Ju-Ping   The Acceptance of Siga Naoya In Tanizaki Junichiro’s works: The Influence of “Nigottaatama” on “Yanagiyunoziken” .......................................................... 1

Tsai, Yi-Ching   An Introductory Analysis about Kitagawa Huyuhiko’s Writing Style of (Full Length Epic) : Focusing on the Connection with Scenario .................. 27

Shen, Mei-Hsueh  The Formation of the “Taiwanese Mood” in Haiku: The acceptance and development of Haiku in Taiwan during the Meiji Era............................. 53

Moriyasu Masako  The Study of Faith in ‘the Chrysanthemum Vow’ the Description of Kill Tanji in the Endng....................................................................................... 79

Liao, Hsiu-Chuan  A Study on the critique in Huo-chuan Chen’s Michi .............................................. 105

Yeh, Ling        To solving the equipment concealing in mystery of ‘the Rat’ through narration of ‘I’: from view point of initial three novel of Haruki Murakami..... 127

Lai, Jinn-Chiu   Japanese adjective of man description in “-i otoko”: The comparison with “-i onna”........................................................................................... 149

Wang, Shih-Ho    The function of a prior announcement: in an argumentative essay............. 171

Wang, Shu-Chin   About the specialization of meaning of “-gatai”: Including the correspondences between “-gatai” and “nán yī -” in Chinese.............................................. 195

Wang, Ming-Tung  Elites in Taiwan during Japan-Colonized Period: Japanese with Physiology Specialty................................................................. 219

Liu, Yen-Chun    The factors of Japan Language curriculum at Public School(Koukakkou):
                 Focusing on the 4th-term Japanese Text Book.................................................. 243

Survey Articles

Huang, Su-Miao
Yamamoto Takashi
Sekiguchi Yo     Development and Implementation concerning the Corpus of Taiwanese Learner of Japanese (CTLJ) ................................................................. 269

Activities Report

Abstract of report in regular meetings ......................................................................... 293

June 2009

JAPANESE LANGUAGE & LITERATURE ASSOCIATION OF TAIWAN